

女川町の新たなまちづくり

名古屋市立大で教えていた頃、東日本大震災後の宮城県女川町へボランティアに出かけたゼミ生がいた。震災復興をテーマにした卒論に、女川についても書いていた。

石巻へは何度か行ったが、女川を訪れたのは2年半前であり、復興まちづくりが進んでいた。ゼミ生の話や卒論とともに、石巻で乗ったタクシーの運転手の「震災後の女川は地獄のようだった」という言葉を確かめるためだ。



朝早かったので、商業施設「シーパルピア女川」は開店前だった。「女川町まちなか交流館」で震災当時や復興まちづくりの一端を写真などで知ることができた。女川駅周辺を駆け足で回ったが、「女川は流されたのではない。新しい女川に生まれ変わるんだ」という垂れ幕が印象に残る。



朝日新聞2月2日朝刊「震災10年、そして」に、新たなまちづくりを「公民連携」で進め、復興モデルとして注目される町として女川が取りあげられていた。記事を抜粋して紹介したい。

女川町のJR女川駅前から海岸へと続くおしゃれな道沿いに、カフェやクラフトビール店、せっけん工房などが並ぶ商業施設「シーパルピア女川」がある。震災後にかさ上げした町有地に2015年に開業した。隣の物産施設「ハマテラス」と共に復興のシンボルとして、女川観光に欠かせない施設になっている。

二つの施設は、商工会や町が出資する株式会社「女川みらい創造」が国の補助金で整備し、テナント募集や運営を行う。計36店舗のほぼ半数は被災店舗の再建だが、地元NPOの支援などで住民や出身者、移住者らの新規出店を促し、町外からの出店も受け入れて多彩な店がそろった。

女川町では震災で最大14.8mの津波に襲われ、住宅の66.3%が全壊し、当時の人口の8.3%の827人が死亡・行方不明になった。不明者の捜索やがれきの片づけが続く中、震災翌月には商工会長の呼びかけで「女川町復興連絡協議会」を設立。これが契機となり、行政と民間が力を合わせて公共サービスを担う「公民連携」による復興が動き始めた。「これからの町づくりは若者に託す。還暦以上は口出ししない」との方針のもと、当時の商工会青年部などが活動の中心となった。

こうして進めた復興計画で、女川町は巨大な防潮堤は造らない町づくりを選んだ。住宅や役場、学校は高台移転し、海沿いはかさ上げして業務区域とした。震災前に約1万人だった人口はいま、約6200人に減った。人口減を補うため、町は住んでいるかどうかを問わず、町内で活動する人たちを増やそうとしている。

(2021年2月7日)